

# 論文の書き方教育：内容と方法(I)

—— 論文とはどういうものか (1) ——

国 崎 敬 一

## 第1節 課 題

### 1.1 背 景

### 1.2 課 題

## 第2節 「論文」という言葉で何を指しているか

## 第3節 論文とはどういうものか —— 諸説の検討

### 3.1 難 題

### 3.2 澤田の定義

### 3.3 斉藤の定義

## 第4節 論文とはどういうものか —— 戸田山の定義

### 4.1 戸田山の定義

### 4.2 検 討

## 第5節 残された課題と今後の予定

## 第1節 課 題

### 1.1 背 景

私は、本学から教育研究助成を受けて、学生にどのように論文の書き方を教えればよいか、その内容と方法を、研究してきた。その現時点での成果を本稿で報告したい。はじめに、なぜそのような研究を行うに至ったのか、あるいは、行う必要があると思うに至ったのか、背景・理由を説明しておこう。

## 1)

数年前人文学部の学部長に就任したとき、様々の分野で学部改革に取り組もうとしたわけだが、そのなかで最も重要なものは、言うまでもなく教育分野でどのような問題があるか把握し、その解決策を策定することであった。その一つとして、学生が論文・レポートを満足に書けないという問題が浮かび上がったのである。

学生の論文を見ると、満足のいく論文が書けていない、いや、満足どころか、ほとんどの論文が論文と言えるものになっていないのである。また、レポートについても同じことが言える。これは教師にとって大きな問題であるが、学生にとっても大変大きな問題である。いや学生のほうがより深刻であろう。なにしろ、大学に入るとすぐに、様々な授業でレポートというものを課され、いついつまでに出せと言われる。期末試験がレポート提出という授業もかなりある。ところが、書き方が分からない。学生たちははなはだ苦勞しているのである。

書けないで苦勞しているのも問題であるが、さらに問題なのは、書き方が分からず、しかもそれで成績が付けられるというプレッシャーがかかっているために、一部の学生が剽窃行為に迫り込まれている可能性があるということである。すなわち、どうしても自分では書けないので、友達のを写す、あるいは本やインターネットのホームページの切り貼りでごまかす、つまり剽窃に走るということが起きているのではないかと推測されるのである。

## 2)

なぜ書けないのか。それは何といっても、書き方が分からないからである。なぜ分からないのか。それは何よりもまず、高校までそして大学に入っても、レポート・論文の書き方をきちんと教わっていないからであろう。もちろん日本の大学全体を見渡せば、書き方を教えられなくても、見よう見まねで書き方を身につけて書けるようになる学生もいるだろう（「昔の学生はみなそうやっ

て書いたもんだ」という声が、多くの大学教師から聞こえてきそうだが)。だが、少なくとも本学にはそのような学生はあまりいない、あるいはあまりいなくなっただと考えられる。だから、書き方を教えられないと書き方が分らず、書くのにはなほだ苦勞するという事になっているのであろう。

数年前「経済社会学」の授業（2年次配当）で100名くらいの学生に、大学に入ってからレポートの書き方を教わったことがあるか、訊いてみたところ、3名ほどが教わったと答えただけである。それは二人の先生が、それぞれの科目の授業で1時間ほど教えておられたのであった。本学全体としてどうかは調べていないのでよく分からない。それぞれの専門科目や1年次生向けの演習の中で、授業の一部として教えておられる先生が、ある程度おられるかもしれない。しかし、少なくとも、本学では1年次生全員に2単位や4単位の科目を立て体系的にまとまった形で〈レポートの書き方〉を教えるということはしてこなかったと思われる（ちなみに、高校までにレポートや調査報告の書き方を教わったことがあるか訊いたところ、これも教わったと答えた者は一人もいなかった）。

論文に関してはどうか。4年次の「卒業論文」の授業で個別的に論文指導が行われている。しかし、これは学生各自の卒論を個別に指導するのが主たる内容であって、論文の書き方を全般的・体系的に教えるための授業ではない。少なくとも、この枠で15～30コマかけて論文の書き方を教えるというようなことは、時間的にもほとんど不可能であろう。このように本学では、レポートの書き方も論文の書き方も、必修で15～30コマとって体系的に教えるということは、行われてこなかったと言っているまい。

これは本学だけの状況ではないと考えられる。日本の大学は全般的に同じような実情ではないだろうか。論文の書き方教育において先進的な欧米の状況を見ると、つとに木下是雄（1990, p. 21-22）の指摘しているとおり、コミュニケーション・スキル（聴く・話す・読む・書く技術）教育の一環として、小学校から大学まで系統的にしかも本格的に、論理的文章・レポート・論文の書き

方が教えられている。大学では、English composition（作文・文章の書き方）、expository writing（説明・論述文の書き方）、academic writing（論文の書き方）、rhetoric（修辞学）、などが学部を問わず必修で教えられているという。<sup>1)</sup> 日本では、小学校から大学まで、少なくともこのような系統的で本格的な論理的文章・論文の書き方教育はほとんど行われていないと考えられる。

要するに、本学の学生に対してきちんとしたレポート・論文の書き方教育が行われてこなかった。それが主たる原因となって、レポート・論文が書けなくなっている。あるいは、書けずに大変苦勞している。この事態を何とかしなければならぬ。それを解決するには、（アメリカで行われているような）最低30コマ程度かけるような体系的で本格的な論文・レポートの書き方教育をさぐり出して、導入するのが最善の策である。そういうわけで、私は、まずどのような論文の書き方教育があり、どのようなものがよいのかを調査研究しようと思い立ったのである。

## 1.2 課 題

### 1)

ここで〈論文を書く〉ということは、言うまでもないことだが、大きく二つの段階に分けられることに留意しておきたい。論文を書くというのは、何らかの問題について調査研究し、その成果を研究者仲間（学界）に対して文章化して発表することであるから、論文を書くという作業は、二つの段階に分けてとらえておいたほうがよい。一つは、問題を立て、答えを探究し、根拠を付けて一定の答えを出す段階、言い換えれば、論文の中身（contents）を構想する（生み育てる）段階である。もう一つは、そのようにして揃った中身を一定の長い文章へと文章化する段階、言い換えれば、論文を執筆する（書き下ろす）段階である。したがって、論文の書き方も、論文の構想の仕方（生み育て方）と執筆の仕方（書き下ろし方）とに分けて考えたほうがよい。

したがって本研究では、論文の〈構想の仕方〉と〈執筆の仕方〉をどう教えるかを探究することになるが、まず先に、後者の〈執筆の仕方〉（論文をどう執筆すればよいのか）を探り、次に〈構想の仕方〉（論文をどう構想していけばよいのか）を明確化していくことにしたい。そして本稿では、〈執筆の仕方〉についての探究の成果の最初の部分を報告することにした。

## 2)

さて、この〈論文の執筆の仕方〉を教えようというとき、論文はこういう構成(形式)で書けばよいという論文の構成をもちろん教えなければならないが、その前に、論文とはどういうものか、論文とは一体何なのかを教えておかなければならない。というのは、学生が論文を書こうとするとき、論文とはどういうものか、言い換えれば、どういうものであればよく・どういうものであってはいけないのか、が分かっていると、ずっと楽に書けるだろう。これが分かていないと、暗中模索の苦労をしなければならず、論文と言える論文を書くのは難しくなるだろうし、書いたものも、果たして論文になっているか、はなはだ心許ないということになるだろう。このように、論文の書き方を教えるとき、まず〈論文とはどういうものか〉を教えておかなければならない。そのためには、当然、教える我々としては、〈論文とはどういうものか〉を明確にとらえておかなければならない。

## 3)

ここで〈論文とはどういうものか〉を明らかにするというとき、それは「論文」という言葉で一般にどのような文章を指しているのか、「論文」の指示対象は何か、言うなれば、「論文」の外延は何か、を調べようというのではない。論文とはこうこうこういうものであるという論文を定義づける諸特徴、言うなれば、論文の内包的定義（論文とはどういうものかをいくつかの記述文によって規定したもの）、を明らかにしようというのである。

またここで、〈論文とはどういうものか〉というとき、論文とは本来どのようなものであるのか、論文とはどういうものであるべきなのかという、規範的な意味で言っているのである。現在書かれている、あるいはこれまで書かれてきた〈論文と称されたもの〉が実態としてどういう文章か、という実態的な意味で言っているのではない。実態としての「論文」の特徴を把握しようというのではなく、論文の規範的な定義を明らかにしようというのである。論文を書くとき、書いたものがどのような文章であればいいのか、どのような文章でなければならないのか、という意味での論文の定義を明らかにしようというのである。学生が論文を書こうというとき、それを分かっているならば、何をすればいいのか分かっている書きやすくなる、そのような論文の定義を明らかにしようというのである。

#### 4)

かくて本稿では、上のような意味での〈論文とはどういうものか〉、言い換えれば、論文の規範的な意味での内包的定義を探り、明確化すること、これを課題としたい。まず、第1節で、一般に「論文」という言葉でどのような文章を指しているのかを確認する。第2節で、定評のある論文の書き方の書物の著者二人（澤田と斉藤）を取り上げ、論文とはどういうものかについての二人の説を検討し、いずれも満足のいくものではないことを指摘する。結論予告的に言えば、戸田山和久の定義が最も正鵠を射ていると考えられる。第4節で、その定義を吟味し、我々の定義として採用できるところを示す。

#### 5)

なお本稿は「論文の書き方教育：内容と方法」という大きな論文の最初の部分を成すものである。その大きな論文は、

1. 論文とはどういうものか
2. 論文の執筆の仕方

### 3. 論文の構想の仕方

の3部から成る予定であり、本稿はその〈1. 論文とはどういうものか〉の前半に当たるものである。

## 第2節 「論文」という言葉で何を指しているか

### 2.1

本稿では論文とはどういうものかを論究したいのであるが、その議論に入る前に、その定義を明らかにしようとしている当の対象の「論文」というものとして、だいたいどのような文章を念頭に置いておけばいいのか分かっておいたほうがよいだろう。そこでまず、一般に「論文」という言葉がどのような文章を指しているのか（言うなれば、「論文」の外延）を、確認しておきたい。ここではそれを、論文の書き方の著作として定評のある澤田昭夫（1977, pp. 15-21）、斉藤孝（1998, pp. 3-7）と、櫻井雅夫（1998, pp. 5-14）とによってまとめておこう。

#### 1)

「論文」という言葉は、狭い意味と広い意味で使われるようであるので、両者を分けて見ていこう。まず、狭い意味で使われるときから見ると、

#### A. 狭い意味での論文

##### (1) 学術論文

まず、「狭義の意味での論文」が指しているのは、学術論文である。その代表的な例をあげれば、

- a. 研究者が学会誌・紀要などの学術雑誌に発表する研究論文（英語で言う research paper）

b. 博士論文 (dissertation/ doctoral thesis), 修士論文 (thesis)

c. 卒業論文 (学士論文) (thesis)

などである。

なお卒業論文は、本来学術論文として書かれるものであり、少なくとも学術論文を目指して書かれているものであるから、ここにあげておくのが適当であろう。ただ実態として、学術論文として学会から認められるものがどれほどあるか分からないが。

「論文」という言葉はまた広い意味でも使われる。一つは、(2)学術論文に準ずるものをさすとき、もっと広い意味では、(3)学術論文的なものの一般を指して使われる。

## B. 広い意味での論文

### (2) 学術論文に準ずるもの

#### a. 学術論文の練習として書かれるもの

学生が卒論を書く前の段階で書く小論文 (英語では term paper がこれに相当すると考えられる。なお、大学入学試験や公務員試験などで書かされる「小論文」はこれとは別のものである)。例えば、ゼミナール (専門演習) での個人研究論文 (「ゼミ論」などともいう) やグループ研究論文など。

また、第1節ですでに言及したが、日本の大学では、「レポート」と称して、授業中に課題としてあるいは学期末の筆記試験の代わりに、しばしば学生に書かせている文章があるが、これは複雑な性格を持ち、かつ曖昧なもので、実はいったい何なのかなかなかとらえがたいものである。この「レポート」とは何なのか、どうとらえておけばよいのかは、別稿で論ずることにして、ここではとりあえず、基本的にそれは〈調査報告〉的なものであ



るが、中には〈学術論文〉的なものもあることだけ指摘しておきたい。したがって、この学術論文的な「レポート」も〈練習段階の学術論文〉の一例としてあげておくことができるだろう。

b. 調査報告 (report)

- ・ 学生が課題として書かされる「レポート」のうち調査報告的なもの。
- ・ 企業の調査部や研究所や官庁などで書かれる調査報告、現状分析レポート、白書など。
- ・ 企業・官庁などで書かれる事業報告、ビジネス・レポートなど

(3) 学術論文的なもの

a. 政策論文

- ・ 政策論文、政策提言書、事業計画書、企画書など

b. 論説

- ・ 新聞の社説、政治的な論文、総合雑誌に書かれる評論など

c. 試験小論文

- ・ 大学入学試験、公務員試験や司法試験などで書かされる論述文

このように「論文」という言葉は、日本では一般に広狭含めおよそ以上のようなものを指して使われていると言えよう。

## 2)

さて本研究では、学生（とくに学部生）に対して論文の書き方をどう教えるかを探っていく。したがって、そこで書き方を教えようという「論文」とは、学術論文であり、具体的には卒業論文、その練習段階の小論文（短い論文）である。ただ直接的には学部段階の学術論文を念頭に置いているが、修士論文・博士論文の書き方にもつながり、その基礎となるような書き方をさぐっていききたい。また、上であげた政策論文や論説の書き方としても応用できるようなものをさぐっていききたい。

### 第3節 論文とはどういうものか——諸説の検討

#### 3.1 難 題

「論文」という言葉が一般に何を指しているかを確認したので、ここでは本題に入って、論文とはどういうものか、つまり、論文の内包的定義はどのようなのか、言い換えれば、論文とはこういうものであるという論文を定義づけるような特徴はどうであろうか、これを明確化したい。

##### 1)

ところが、これが意外に難題なのである。論文の書き方にかんする書物は、数多く出ている。当然そこには、論文とはどういうものか（定義的なもの）が書かれていると誰もが期待するであろう。ところが、意外にこれがほとんど書かれていないのである。この辺のところを、例えば鷺田小彌太（1999, pp. 18-22）は次のように述べている。

…そもそも論文とはどういうものか。これもやっかいな問題で、簡単明瞭な答えが出るわけではないが、少し考えてみる価値はあるだろう。私が目にしたかぎり、「論文」の書き方にかんする書物で、「論文とは何か」を明確に定義したものはない。万人に自明のものになっているからではない。

「論文」が意味するところは、時代や国によって異なり、こうだ、と一義的に定義しにくいからである。

では、このように述べる鷺田はどのように定義しているだろうか。鷺田は上の記述に続いて、国語辞典の「論文」の項の記述（定義）を紹介する。例えば、広辞苑の、

- ① 論議する文。理義を論じきわめる文。論策を記した文。
- ② 研究の業績や結果を書き記した文。

など。しかし、辞典的「定義」では論文の明確な定義を得る上で限界があるとして、次に「好著として名高い澤田昭夫『論文の書き方』」を取り上げる。そこに挙げてある「論文」の例、すなわち「英語のレポート、リサーチ・ペーパー、ターム・ペーパー、シーシス、ディサテーションなど」を紹介する。しかしこれは、論文の外延(例)を示しているだけで、(内包的)定義を与えているわけではない。そして最後に鷺田は、定義にかんする議論をこうまとめている。

…いずれにしても、「論文」とは、対象が何であれ、長さがどうであれ、発表場所がどこであれ、研究と調査によって書かれた文章である。

結局、この「研究と調査によって書かれた文章」というのが、鷺田が与えた「論文」の明確な定義ということになるのである。

## 2)

しかしこれでは、あまりに簡単にすぎる。それに「研究と調査によって書かれた」だけでは、定義として不十分である。研究と調査によって書かれた一体どういう文章なのかが規定されていない(極端な話、この定義では、研究と調査によって書かれた小説も論文ということにならないか)。この定義は、結局、論文が論文となるために不可欠な事前の作業を述べているだけである。直接論文そのものをこうだと定義したものとはなっていない。たとえば、「肉じゃが」を定義するのに、「牛肉とジャガイモを使って作られる料理」と定義するようなものである。これでは、「肉じゃが」がどういうものか少しも分からないし、肉じゃがを作るのに役立たない。学生に論文の書き方を教えるために

は、論文とはどういうものか分かり、論文を書くのに役立つような「定義」が必要なのである。

### 3.2 澤田の定義

#### 1)

澤田の記述を見るかぎり、そのような定義を見つけるのはなかなか難しいようである。一体あるのであろうか。そこで私は、入手できるかぎりで論文の書き方の書を集め（——参考文献に挙げてあるもの）、論文とはどういうものかについての記述を調べてみた。論文とはどういうものかについてほとんどの書物は、何も言っていなかった。ここでは、その中で比較的検討に値することが書かれているもの二つについて、検討していくことにしたい。それは、先にも挙げた澤田昭夫『論文の書き方』（1977）と齊藤孝『学術論文の技法（第2版）』（1998、第1版は1977）である。まず、前者について見ていこう。

その「序」（pp. 15-21）が論文とはどういうものかが書かれるべきところである。しかし、そこには論文の内包的定義は何も書かれていない。

冒頭に（p. 15）「論文」で筆者が何を指しているか、何を想定しているか、つまり「論文」の外延が示してある。

…論文というと、英語のリポート、リサーチ・ペーパー、ターム・ペーパー term paper、シーシス thesis、ディサテーションなどを含みます。

そのあとに、日本語で「試験論文、卒業論文、学位論文、研究論文」とも書いているが、これはそれぞれ英語の term paper, thesis, dissertation, research paper に対応するものとして挙げているようである。次いで、技術者やビジネスマンが書く「テクニカル・リポート」や「ビジネス・リポート」を挙げているが、これは最初に挙げた「リポート」の具体例であろう。つまり「論

文」の外延としては、最初のことを想定していると言える。そして、注で (p. 21)それぞれがどういうものを説明している。まとめると、次のようになる。

リポート：程度の差こそあれ多少の研究・調査にもとづいて書かれた報告一般（学術的報告に限らず，高校生の作文や，会社の事業報告，政府の白書もこれに入れてよい）

ターム・ペーパー：注などつけずに，自分の考えを軽くまとめた学生リポートで，10～15 頁のもの（なお，ここで1 頁とは英語で約 300 語書かれたものである。）

リサーチ・ペーパー：注をつけた，研究の裏付けのある論文で，15～30 頁のもの

シース：学士，修士論文。60～100 頁のもの。高度のリサーチ・ペーパー。

ディサテーション：博士論文。150～300 頁のもの。高度のリサーチ・ペーパー。

## 2)

要するに，ここには「論文」の明確な内包的定義は書かれていない。では，他の箇所ではどうかというと，そこにも書かれていない。結局，澤田は明確な定義を与えていないのである。ただ，上記の「論文」の例やその説明，そして2章以降での論文の書き方の叙述から，論文がどういうものでなければならぬか，どういうものであればいいのかがおぼろげながら浮かび上がってくるので，そこに論文の内包的定義が暗示的に示されていると言えなくもない。しかし，いずれにしろ明示的には一切書かれていない。

### 3.3 齊藤の定義

そこで次に，これも論文の書き方の書物として定評のある齊藤孝『学術論文

の技法（第2版）』（1998）を見てみよう。

## 1)

論文の定義にあたるものは、「序章 学術論文とは何か」（pp. 3-13）に書いてある。まず、齊藤は p. 6 に「論文」と呼ばれるものとして、学術論文や「総合雑誌や新聞に出る評論」、「会社の調査室や研究所などによる現状報告・調査報告」を挙げている。「学術論文」と呼ばれるものとしては、卒業論文、修士論文、博士論文、「学術雑誌・論集に載せられる研究論文」を挙げている。論文の外延を示しているのである。

次いで論文の内包的定義であるが、齊藤は論文一般の書き方でなく、学術論文の書き方を指南しようとしているので、論文でなく、学術論文の定義について、「2 学術論文の目的と特質」（pp. 7-13）で、次のように書いている。

「論文は、それぞれの学問分野で専門の研究者によって書かれるもので、その著者が自分の研究でえた結果を報告し自分の意見をのべたものであり、それによってその学問分野に新知見をもたらすものである。」

論文とは何かについての八杉龍一氏のこの定義は、簡潔で明快であります。

このように齊藤は、八杉の定義に賛同し、それを採用している（もちろんここで「論文」とは、「学術論文」の意味である）。

## 2)

しかしながら、氏はさすがにこれでは「簡単にすぎる」として、アメリカの A. J. Roth, *The Research Paper, Form and Contents* (1966, pp. 8-10) における research paper (研究論文) の説明を借用しつつ、詳しい定義を与えようとする。だが、この Roth の記述も定義を positive な形で与えたものではない。論文と

はどういうものかを **negative** な形で示そうとしたものである。論文とはこうだ、と述べたものではなく、論文とはこうではない、と述べて、論文とは何かを暗示しているものである。それをまとめると、次のようになる（なお、ここで斉藤は「学術論文」と「研究論文」を互換的に使っている）。

研究論文ではないもの：

- (1) 一つの書物や論文を要約しただけのもの

論文には自分の考えたものがなければならないから

- (2) 他人の説を無批判に繰り返したもの

論文には自分なりの意見がなければならないから

- (3) 引用を並べただけのもの

論文は自分が執筆するものでなくてはならないから

- (4) 証拠立てられない私見だけのもの

論文には結論を導き出すための証拠が必要であるから

- (5) 他人の業績を無断で使ったもの

人の業績を利用するときは、その部分にその旨断らねばならないから

これらの記述からいづれも漠然と論文の **positive** な定義が見えてくるが、いうまでもなく明らかにこれは論文の明確な定義（**positive** な定義）を与えたものではない。

以上の記述以外に、斉藤が論文の定義にあたるものを書いているところを抜き出すと、p.7の「論文を読む直接の対象として想定されるのは、その分野および関連分野の研究者である」と、p.9の「学術論文とは、自分の研究の結果を論理的な形で表現するもの」で、「感情的」に表現してはならない、というところである。

以上斉藤が述べているところから、斉藤が、八杉の定義を引き継ぎつつ、論文の定義として考えていると思われるものを、箇条書き的に書き出すと、次の

ようになるだろう。

論文とは：

- (1) 研究者が同じ学問分野の研究者たちに向けて、
- (2) 自分の研究でえた結果を報告し自分の意見をのべたものである
- (3) その学問分野に新知見をもたらすものである
- (4) 論理的な形で表現しなければならないものである

### 3)

さて、これらが論文の定義として、言い換えれば、論文とは何かの把握として妥当なものか、検討しておこう。

まず(1)は、的確な規定である。誰も異論がないであろう。ただ(1)は、論文とはどういうものの規定として周辺のものであり、論文そのものの定義は(2)(3)(4)が与えている。特に(2)が論文の定義の核心を成すべき条件であると考えられる。

その(2)はどうであろうか。残念ながら、これは論文の定義として満足のいくものではない。まず、「自分の研究でえた結果を報告し自分の意見を述べたもの」という表現の意味がもう一つよく分からない。これはどういう意味だろうか。特に「意見」とはどういう意味であろうか。八杉が念頭に置いているのは学術論文であろうから、おそらく〈価値判断の入った主張〉という意味での「オピニオン (opinion)」ではなく、「考え (thought)」といった意味であろう。つまり、「事実」と対比した意味での「考え」という意味であろう。とすると、「研究の結果を報告する」というのは、〈研究の結果としてえられた事実を報告する〉という意味にならざるをえないだろう。とすると、当然、〈研究の結果を報告し自分の意見を述べる〉というのは、素直に解釈すると、〈研究で把握した事実を報告し、それについての自分の考え（考察・分析・解釈など）を述べる〉という意味になるだろう。



しかし、これは研究や論文の実態にそぐわない。研究は、(なんらかの研究対象についての) 事実の把握を行うだけではない。その事実考察を加える、分析する、解釈するといったことを行って、自分なりの結論に達するという作業である。これがなければ、単なる事実調査であり、研究とは言えない。とすると、研究の結果に、事実把握だけでなく考え(考察・結論)が入っているわけであるから、〈論文は、研究でえられた事実(結果)を報告し、それについての意見を述べる〉というとらえ方は、実態に合わない、的はずれの言い方であると言わざるをえない。

かくて、八杉＝斉藤の論文の定義の核心を成す(2)は、論文の定義としての確なものではなく、我々の定義としてそのまま採用することはできない。

ただ、八杉の定義に妥当なところがみてとれないわけではない。八杉の言いたかったことを推察すると、〈論文とは、自分の研究でえた結果を発表するものである。そしてその発表のなかで報告したり意見を述べたりする〉といったところであろう。このうち、前半の〈論文とは、研究の結果を発表するものである〉という規定は、論文の定義としておおよそ妥当なものと言えるだろう。あまりにも当たり前のことではあるが。

さて、(3)の規定は的確であり、妥当である。

(4)はどうだろうか。一見、妥当であるように見える。だが、ここで〈論理的な表現〉とはどういう意味なのか、明確でないのである。というのは、これに続けて、〈論理的に表現すること〉を説明した箇所では、「学生が書いたものを見ると、論理的というよりはむしろ感情的なものがあります」とか「なるべく修飾語を使わないことが論理的表現のための出発点」といったことしか述べていない。つまり、〈論理的〉の意味として、〈感情的でない〉という意味しか示しておらず、〈論理的〉の positive な意味は何一つ示していないからである。したがって、この規定も、意味が明確でないから、我々の論文の定義として採用しないことにしよう。

以上(八杉＝) 斉藤の定義を検討した結果をまとめると、まず、論文の定義

の核心を成す規定と考えられる〈(2)自分の研究でえた結果を報告し自分の意見をのべたものである〉は、論文の定義として採用できるものではなかった。ただ、その真意を忖度して言い換えた

(2′) 論文とは、研究の結果を発表するものである

は、論文とはどういうもののかの把握として、おおそ妥当なものであった。そしてさらに、周辺的な条件ではあるが、

- (1) 研究者が同じ学問分野の研究者たちに向けて、
- (3) その学問分野に新知見をもたらすものである

の二つは、妥当な規定として採用できるものであった。

#### 第4節 論文とはどういうものか——戸田山の定義

以上、論文の書き方にかんする書物として定評のある二つの書物を見てきたが、論文の定義として満足のいくものはなかった。特に、論文の本質を的確に捉えた定義がなかった。やはり鷺田の言うとおりで、『論文』の書き方にかんする書物で、『論文とは何か』を明確に定義したものはないのであろうか。管見の及ぶかぎりでは、鷺田がこう書いた1999年時点では、鷺田の言うとおりであったと言えるだろう。だが、そのあとにかなり明確な定義を与えた書物が出ているのである。戸田山和久『論文の教室』(2002)がそれである。これを紹介して、論文の定義、論文をどういうものとしてとらえるべきかを考えていきたい。

#### 4.1 戸田山の定義

##### 1)

戸田山が与えている「論文」の内包的定義を見る前に、外延をどのように捉えているかを見ておこう。

実は、戸田山は、「論文」という言葉で何を指すか、「論文」の外延はどのようなものかについて、何も書いていない。p. 12 に、戸田山が書き方を教えようとしている「論文」として、大学生が書かされる小論文（ゼミ論や論文的なレポート）や卒業論文を想定しているということは書いているが、これは「論文」の外延を示したものではない。ただ、この教える対象として想定しているものから推測すると、「論文」の外延としておそらく学術論文を想定しているのであろうということは言える。

##### 2)

戸田山は論文の外延については何もふれていないが、論文とはどういうものか、つまり論文の内包については、明確に述べている（pp. 37-41）。それをまとめると次のようになる。なお戸田山は、狭義の論文だけでなく、学生が書かされる「論文的なレポート」も対象に含めて記述しているので、それに関する部分を除いて、狭義の論文の定義にあたるもののみを抽出して、整理する。

論文とは次のようなものである。

##### (1) 論文には問いがある。

- ・論文とは、「なぜ……なのか」、「われわれは……すべきか」などといった明確な問いを立て、それを解決することを目指す文章である。

##### (2) 論文には主張がある。

- ・問いに対して答えを出し、その答えを主張する。

- ・自分の主張を自分の責任で引き受ける勇気、何ごとかを言い切る勇気が大切である。

(3) 論文には論証がある。

- ・問いと答えだけでは論文にならない。自分の答え（主張）を読み手に納得させるための論証が必要である。
- ・論証とは、自分の主張を論理的に支える根拠を提示して、主張を根拠づけることである。
- ・論文に書けるのは、事実と意見だけである。気持ちを書いてはいけない。感情に訴えて説得するということはしてはならない。

以上まとめると、論文とは、次のように定義できる文章である。

- (1) 明確な問いを立て、その問いに対して一つの明確な答えを主張し、
- (2) その主張を論理的に裏づけるための事實的・理論的な根拠を提示して主張を論証する。

3)

そしてこれに続けて、次のように補足的な説明を付けている (pp. 41-50)。  
まとめると、

- a) 問いも答えもそれぞれできるかぎり明確になっていなければならない。

例えば、「動物と人間の関係をどう思うか」という問いでは曖昧すぎて、論文の取り組む問いにはならない。少なくとも「動物実験は倫理的に許されるか」程度には明確でなければならない。答えも、例えば、「動物実験が倫理的に許されるか、許されないか」ははっきりしていなくてはならない。もちろん、「これこれの条件付きで許される」という答えでもいいのだが、その場合も付帯条件を明確に示しておかなければならない。

- b) 答えは、問いに正面から答えたものでなければならない。はぐらかし

はいけない。

例えば、「〇〇に賛成か反対か？」という問いには「賛成」、「反対」と、「なぜ……なのか」という問いには、「……だから」という具合に答えなくてはならない。

- c) 「問い+答え+論拠」以外のことを書いてはいけない。

例えば、その課題を選んだ経緯、自分がその意見をもつに至った事情、その他の「自分語り」などを書いてはならない。

- d) 論文とは自分の考えを普遍化された形で書いたものである。

「主観的な記述を排除すべし」というのは間違いである。論文とはむしろ自分の考え（判断・主張など）を書くものである。自分の考えを記述する、つまり主観的な記述も書くものであるが、必ず論拠を示されていなくてはならない。すなわち、論拠を示さずに自分の考えを書いてはならないのである。

- e) 論文は第三者にチェック可能なものでなくてはならない。

どんな読み手も、筆者の考えた筋道を自分でたどってチェックできなくてはならない。したがって、筆者は自分が利用したり依拠したりした素材（調査、統計、テキスト、先行論文）を読者もチェックできるよう典拠を示しておかなくてはならない。

- f) 論文の形式は一般のルールを守らなくてはならないが、論文の内容、つまりどう主張するか、どう論証するかは、自分で探し、考え、書かねばならない。そしてそれに自分で責任をとらねばならない。そういう意味で論文は「自由に書く」ものである。

以上のような戸田山の論文のとらえ方を詮じつめてまとめると、次のようになるだろう。

論文とは次のような文章である。

- (1) 明確な問いを立て、その問いに対して一つの明確な答えを主張する
- (2) その主張を論理的に裏づけるための事實的・理論的な根拠を提示して主張を論証する

## 4.2 検 討

このように戸田山は、論文とはこういうものだ、明確に述べている。しかも、「これが定義」である、とまで述べているから、これで論文の明確な規定を与えようとしているのである。さて、戸田山のこのようなとらえ方は、論文とはどういうものかの答え、つまり論文の内包的定義として、妥当なものであろうか。論文の書き方を教える上で有効なものとして採用できるであろうか、検討しておこう。

### 1)

まず、(1)「論文とは明確な問いを立て、その問いに対して一つの明確な答えを主張する文章である」という条件はどうであろうか。これは、八杉＝斉藤の把握と比べると、論文の本質を格段に的確にとらえたものだと言えよう。なぜそう考えるか説明しておこう。

上で見たように、八杉＝斉藤では、論文とは〈研究の結果を発表する文章であり、その中で報告したり意見を述べたりするものである〉というようにとらえられていた。また、日本においては、八杉のような捉え方がまだ一部で続いているように見受けられる。つまり、〈とにかく論文とは、研究の成果を発表するものであり、その中で事実の報告や考えの主張などを行うものである〉というような漠然としたとらえ方である。

しかし、そもそも研究というものがどういうものであるかを振り返ってみると、それは、何か分からないこと・知られていないことで明らかにしたいこと・すべきこと、すなわち、本当はどうであるかを探究しようとする何か、つ

まり謎・問題・問いが最初にあるのである。もちろん、それは、はじめは問題感覚、問題意識といった漠然としたものであるかもしれないが。そして、研究とは、次にその問いを明確化しつつ、問いの答えを探究していくこと、問題の解を探していくことである。そして最終的に、自分なりの明確な答えを出すことである。このときには、問いが明確になっている。このように、研究というものは、最終的な成果の段階では、研究者が明確な問いを立て、それに対して（その段階のであれ一定の）明確な答えを出すという形になっているものである。そして、先に見たように、論文とは研究の成果を発表するものであるから、当然、論文は、まず、〈問いを明示して、それに対して答えを出しそれを主張する〉ものとなるはずのものであり、そうなるべきものなのである。

要するに、本来研究は明確に問うてそれに明確に答える作業であり、論文は研究の成果の発表であるから、論文は明確に問うてそれに明確に答える文章であるということになるのである。戸田山はこのことを明確に把握しており、したがって、戸田山の定義は的確なものと言えるのである（論文をただく研究の成果を発表するもの、そこで報告したり考えを述べたりするもの）としか捉えられないのは、論文、そして研究の本来のあり方をもう一つ正確にとらえ損なっているからであろう）。

## 2)

また、戸田山が論文は明確に問うて答えるものであるということを明確に言い切ったことは、高く評価すべきものである。

日本では、明確な問いもなくただ漫然と書物を読んだり、調査をしたりしているうちにいろいろなことが分かったというのを「研究」と考え、そのようなことをただただ陳述したものを「論文」と考えて発表するというのが、今でも行われているように見受けられる。これは、論文も研究も、明確に問うて明確に答えることが不可欠であるということが、もう一つ明確に認識されていないからではないだろうか。このような現状をみると、戸田山の定義の意義はか

なり重いのである。<sup>2)</sup>

細かく言えば、まず、本来論文には問いがあるものである、あるいは、論文には問いがなければならないということ、つまり問いの存在の不可欠性を、明確にした点だけでも、戸田山の定義は高く評価できる。というのは、日本で書かれている「論文」と称するもののなかには、問いが明確に立てられていないし、示されてもいないものがときどき見受けられるからである。論文には明確な問いがなければならないということが、日本ではもう一つ明確に認識されていないのではないだろうか。

また、論文における主張（結論）を、問いに対する答えとしてとらえた点も評価できる点である。日本人の論文は主張がいろいろ拡散していたり、ぼやけていたり、はっきりした主張がなかったりして、結局何が言いたいのか分からない雲をつかむような文章だと、外国人からしばしば酷評される（加藤恭子、ヴァネッサ・ハーディ、1992などを参照）。これは、往々にして日本人は、漫然とある研究分野について得たさまざまな知見をただただ述べればいいという論文のとらえ方をしており、明確な問いに対する明確な答えとして主張を書くのだという意識が希薄であるから、的を絞れずいろいろなことを主張してしまったり、（暗示的に問いがあったとしてもその）問いに対応する答えを書かなかったり、ずれた（＝その問いに正面から答えていない）答えを書いてしまったりするからだと考えられるのである。

### 3)

かくて、我々は、「論文とは、明確な問いを立て、それに対して明確な答えを主張する文章である」という規定を、我々の論文とはどういうものかの核心を成す規定として採用することにしたい。



## 第5節 残された課題と今後の予定

本来であれば次に、戸田山の定義の第2項「(2)その主張を論理的に裏づけるための事實的・理論的な根拠を提示して主張を論証する」について検討すべきところであるが、紙数が尽きたので、それは本稿の続編にて論ずることにしたい。その後で、私なりの〈論文の定義〉を提示し、読者のご批判を仰ぐこととしたい。

### 注

- 1) さらに、論文は文章の書き方だけでは書けないので、併せて、critical thinking, logical thinking といった思考を吟味する仕方、論理的思考の仕方を教える科目も置かれているようである。
- 2) 翻って考えるに、そのような明確に問うて答えていないものも日本では一応「論文」として認知されているので、論文とはどういうものか、論文の本質がわかりにくくなり、定義が難しくなっているという可能性もあるだろう。

### 参 考 文 献

- アーマー, A., 河内恵子, 松田隆美, スネル, W.(1999), 『アカデミック・ライティング応用編—文学・文化研究の英語論文作成法—』, 慶應義塾大学出版会
- 逢沢明 (2003), 『京大式ロジカルシンキング』, サンマーク出版
- 猪狩誠也, 杉本忠明 (編) (2003), 『大学で教える小論文の書き方』, インデックス・コミュニケーションズ
- 磯貝友子 (1998), 『アカデミック・ライティング入門—英語論文作成法—』, 慶應義塾大学出版会
- 伊丹敬之 (2001), 『創造的論文の書き方』, 有斐閣
- 江下雅之 (2003), 『レポートの作り方』, 中央公論新社
- 小野俊太郎 (1999), 『レポート・卒論の攻略ガイドブック [英米文学編]』, 松柏社
- 加藤恭子, ヴァネッサ・ハーディ (1992), 『英語小論文の書き方』, 講談社
- 上村妙子, 大井恭子 (2004), 『英語論文・レポートの書き方』, 研究社
- 川喜田二郎 (1967), 『発想法』, 中央公論社

- 木下是雄 (1990), 『レポートの組み立て方』, 筑摩書房
- 木下長宏 (2000), 『大学生のためのレポート・小論文の書き方』, 明石出版
- 工藤順一 (1999), 『国語のできる子どもを育てる』, 講談社
- (2003), 『論理に強い子どもを育てる』, 講談社
- 慶應義塾大学通信教育部 (1995), 『卒業論文の手引き〔新版〕(新装版)』, 慶應義塾大学出版会
- 言語技術の会 (1990), 『実践・言語技術入門』, 朝日新聞社
- 河野哲也 (2002), 『レポート・論文の書き方入門 第3版』, 慶應義塾大学出版会
- 斉藤孝 (1977), 『学術論文の技法』, 日本エディタースクール出版部
- (1998), 『学術論文の技法 第2版』, 日本エディタースクール出版部
- 櫻井雅夫 (1998), 『レポート・論文の書き方 上級』, 慶應義塾大学出版会
- 澤田昭夫 (1977), 『論文の書き方』, 講談社
- (1983), 『論文のレトリック』, 講談社
- 高根正昭 (1979), 『創造の方法学』, 講談社
- 戸田山和久 (2002), 『論文の教室 レポートから卒論まで』, 日本放送協会出版部
- 榎木伸明 (2006), 『卒論を書こう (第2版)』, 三修社
- 浜田文雅 (1996), 『文章理解の方法』, 慶應義塾大学出版会
- 二木麻里, 中山元 (2001), 『書くためのデジタル技法』, 筑摩書房
- 野口悠紀雄 (2002), 『「超」文章法』, 中央公論社
- 速水博司 (2003), 『大学生のための文章表現入門【演習編】』, 蒼丘書林
- 樋口裕一 (2002), 『やさしい文章術 レポート・論文の書き方』, 中央公論新社
- (2005), 『できる人の書き方』, ビジネス社
- 保坂弘司 (1978), 『レポート・小論文・卒論の書き方』, 講談社
- 水野麻里 (2004), 『プロの書き技』, 新風舎
- レメニイ, D. (小樽商科大学ビジネス創造センター (訳)) (2002), 『社会科学系大学院生のための研究の進め方』, 同文館出版
- ロシター, P., 東京大学教養学部英語部会, *First Moves: An Introduction to Academic Writing in English*, 東京大学出版会
- 鷺田小彌太 (1999), 『入門・論文の書き方』, PHP 研究所
- 鷺田小彌太, 廣瀬誠 (1994), 『レポート・論文はどう書くか』, 日本実業出版社
- Roth, Audrey J. (1966), *The Research Paper, Form and Contents*, Belmont, Calif.

\* 本論文は2005年度松山大学教育研究助成による研究の成果の一部である。記して謝意を表したい。